

□消防行政への外国人住民のための 「やさしい日本語」適用を考える

外国語に依存しない大規模災害時の合理的で科学的な情報伝達法

弘前大学 佐藤和之

はじめに

マグニチュード8から9クラスの大地震が2046年までに南海トラフ沿いで起きる可能性は70%との予測がある(2016年度防災白書)^{*1}。これより先の2012年度白書^{*2}では、震度6以上が起きそうな地域は21府県395市町村、満潮位の津波高が10m以上になりそうな地域は11都県90市町村としている。

ところで日本に住む外国人だが、2016年末の数は約238万3千人で、そのうちの54%が東京、愛知、大阪、神奈川、埼玉に住んでいた^{*3}。すなわち首都直下地震、南海トラフ地震によって大きな被害を受けそうな地域に半数以上が住むのであり、見方を変えれば残りの110万人は日本各地に満遍なく住んでいるわけである。その多寡に違いはあっても、外国人は日本のどこにでも住んでいるのであり、外国人にも伝わることを意識した情報はいまやどの自治体にとっても住民サービスの一環となっている。とくにその情報が命や安全に係ると

き、特定の住民にだけ伝わらないということがあってはならない。一方で、外国人住民の少ない地域では彼らのためだけに時間や人員を割くことは難しく、必要な住民サービスができない状況にあることも事実である。

大規模災害を覚悟せざるを得ない一方で、外国人住民の増加を前に、私たちはどうやって地域の安全を担保し、住民に安心を提供するのか。首都直下地震、南海トラフ地震の発生を強く意識しながら、外国人住民への避難指示や注意喚起の情報をいち早く、確実に伝えるにはどうすべきか、外国語に依存しない合理的かつ科学的な情報伝達の方法とその整備について論述する。この論文ではとくに消防行政に係る皆さんに読んでもらうことを想定した。大規模災害の発生よりも前に、消防行政に携わる皆さんは、ここで提案する方策をもとに、予防、受信、救急、救助、消防といった最前線で活動する職員たちのための外国人住民対応マニュアルを用意して欲しく、その一助になることを意識した論を展開する。

佐藤和之 弘前大学大学院教授。地域社会研究科で地域言語行動論を担当。

社会の構成員が混在化する地域の言語変容研究を専門とし、「やさしい日本語」研究はその一環。地域社会に迎えたさまざまな国からの住民を情報弱者にしないための減災研究に取り組む。2000年に「やさしい日本語」研究で消防庁長官賞と村尾学術奨励賞(神戸に貢献のあった研究に与えられる賞)を受賞。「やさしい日本語」に関わる2016年の主要論文は以下の通り。

- ・外国人被災者の心の負担を軽減する「やさしい日本語」であるために『わかりやすい日本語』(2016)
- ・外国人住民のための「やさしい日本語」～1.17、10.23、3.11の教訓を南海トラフ地震・首都直下地震に活かす～『マッセ OSAKA 研究紀要』19(2016)
- ・災害下の外国人住民に情報を迅速に伝える「やさしい日本語」『ガバナンス』182(2016)

大地震の発生と被災外国人

日本に住む外国人の多くは、日本に来る以前に地震を経験していないことから、地震が発生した時の対応を知らない。日本人は子供の頃からの経験で、そのときの揺れによってその後何が起きそうかや、どうやって身を守るかを体得している。しかし経験則を持たない彼らは、行動の予測ができないため、僅かな揺れや本震後も続く余震に大きな不安を抱き、過剰な行動を起こすことがある。

2016年4月に起きた熊本地震でも、外国人被災者は「災害情報がほとんど日本語であったこと」や「出身国で地震を経験したことがなく、今後のことがまったく予測できなかった」などから「地震への恐怖」が生じて不安だったことを報告する^{*4}。また避難所へ逃げても「日本語で示されるルールや案内が分からずストレスを感じて退去」した例や「熊本市に住む外国人の大多数は日本語での日常会話はできますが、『避難所』『物資』『給水』など災害時などでしか使われない言葉は難しかったのだと思います」といった報告もある^{*5}。

災害はいつも通りの日常を断ち切り、突然の変化を被災者に経験させる。地震への経験則がない外国人にとっては今後の予測がつかない変化であり、対策の分からない行動を求められる変化である。これから何が起きるのかや何をなすべきかが分からない外国人は、ただただ大きな不安だけを抱える。さらに彼らには日本語が十分でないという事情もあり、難しい日本語だけで伝えられるリスク回避の情報は彼らに理解できずパニックを起こしやすい状況になる。災害発生時に外国人と関わる消防あるいは救急、救助任務に就く職員や機関はこの状況を緩和させる術を持っていることが極めて大切である。

ここまでの、外国人をパニックにさせない不安軽減策を整理すると、災害発生時の行政がなすべきは二つである。①外国人に何が起きたのかを迅速に把握させることであり、②外国人が持たない

不安の軽減策やリスクの回避策をパニックを起こすより前に知らせることである。

首都直下地震や南海トラフ地震を意識した①と②のための手順を整備することが早急の課題となる。

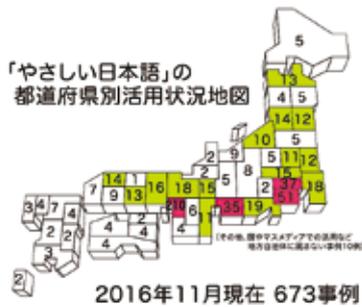
在住外国人のリスク回避と不安軽減のための合理的な解決法

災害が起きたとき、相手が外国人という理由から①と②の活動を躊躇したり諦めたりすることはないだろうか。外国語で伝えなければとの考えから、発災直後にもっとも大切な①と②を伝えず、結果として外国人被災者を取り残してしまうことはないだろうか。あるいは近隣住民の善意に頼りきってしまっていないだろうか。そういうことがないよう、発災直後の行政は外国語での解決は不可能ということを私たちは承知しておく必要がある。つぎに外国人には外国語という呪縛から解放される勇氣を持っていることも大切である。私たちが救おうとしているのは、日本語にまったく触れたことのない外国人でなく、長短はあっても日本に住んでいる外国人である。

消防行政が住民のためになすべきは、消防の広報車や消防車、防災無線で伝える情報が、外国人被災者も即座に理解できる表現にすることである。自然災害についての経験則がない彼らでも迷うことなく行動に移せる具体的な表現で伝えることである。「即座に理解できる」と「迷うことなく行動に移せる」表現ということと、長短はあっても「彼らは日本に住んでいる」の3点が解決の糸口である。

日本に住む彼らにとっての共通語は英語でも中国語でも韓国・朝鮮語でもなく、日本語である。伝える側の日本人にとっても、リアルタイムの情報を即座に、そして責任をもって伝えられる言語は日本語である。この、日本に住んでいる世界各地からの外国人に災害情報を迅速かつ確実に伝え

られる表現として、おおむね2000の語を12の規則にそって伝える災害発生後72時間のための日本語がある。行政やコミュニティーFMが導入を進める「やさしい日本語」である。2016年11月末の活用数は、国や全都道府県を併せ673例であった。○大規模災害下を生き延びる情報を保障する、○多言語支援を妨げない、○誤訳が少なく迅速な多言語化への元文となる、○リアルタイムで行政が外国人住民に情報を伝えられる、○日本人への情報伝達を補完する、○外国人住民に地域復興の力となってもらえることをその特徴とする。



「やさしい日本語」とは

「やさしい日本語」は、大きな災害が起きたとき、日本に住む外国人が適切な行動をとれるように考えられた。災害発生からの72時間を、外国人自らの判断で生きるための情報を行政が伝えることを目的にしている。阪神淡路大震災をきっかけに研究が始められ、新潟県中越地震や東日本大震災で使われ、外国語で翻訳するより利便性が高いことから広く活用されるようになった。96年の熊本県地震でも多言語の一つとして活用された。

「やさしい日本語」は、漢字圏、非漢字圏の出身に関わらず、日本に住んで1年くらいの外国人なら80%以上が理解できる表現になっていて、小学校3、4年生の国語教科書に書かれているくらいの文表現である。外国人にとっては、友人と待ち合わせたり、自分の欲しいものを説明して買い物ができたりする程度の日本語レベルになっている。

予備知識や経験則のない災害を、外国人自らの判断で生きてもらうための情報を伝えることから、その表現は曖昧性がなく、誤解を生じさせない、聞いて（読んで）すぐに理解し、行動に移れる表現である。他方の、情報を伝える側の日本人にとっては、速やかに、そして正確に作れる表現にしている。たとえば避難所への誘導は次のようにして伝える。

避難所<みんなが逃げるところ>は安全です。避難所はだれでも使うことができます。外国人も使うことができます。避難所に行ってください。ぜんぶ無料です。お金はいりません。避難所<みんなが逃げるところ>でできることを知らせます

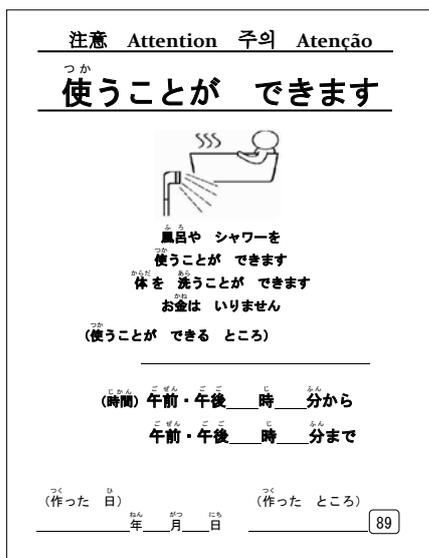
- ①水や食べ物や情報をもらうことができます
- ②トイレに行くことができます
- ③寝る場所もあります

「やさしい日本語」では、災害直後にあっても、外国人が確実に理解し行動を起こせる文構造にしている。「給水車」を「水をくばる車」、デマを「うその話」のように、難しいことばを避けて簡単な語で言い換える。災害時によく使うことばや知っておいた方がよいことばは、そのまま使い、説明を加える。たとえば避難所や炊き出しは、避難所<みんなが逃げるところ>、炊き出し<温かい食べ物を作って配ること>と表現する。平仮名だけで書いて1文を24文字以内、多くても30文字までで表現する。「飲めないことはない」のような二重否定の表現は避ける、といった規則に従って作る^{*6}。

ところで防災無線や消防などの広報車からの避難勧告はその典型だが、災害が起きた直後は、被災者に緊急性の高い情報を音声で知らせる。そのためには文の表現だけでなく、外国人が放送を

聞いて情報が伝わる読み方をしなければならない。そこで「やさしい日本語」の読み方スピードは、放送原稿をひらがなで書いたとして、長くて30文字以内の文を、1分あたり360文字で読むようにしている。「地震は止まりました。落ち着いてください。これからも、大きい地震が続くかもしれません」のようにである。このスピードで放送すると、日本に住んで1年くらいの外国人でも89%が伝えている内容を正しく理解する。さらに、いろいろな世代の日本人にも受け入れられる読み方であることも確認した^{*7}。

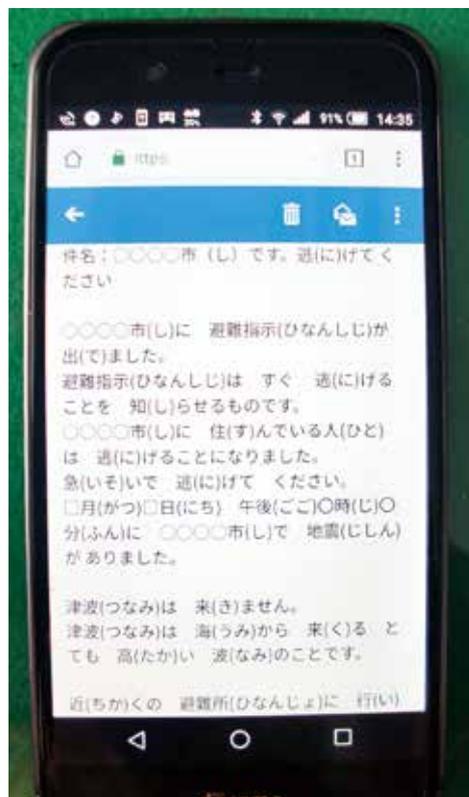
放送や広報車で被災者を安全な場所に誘導した後は、紙媒体で情報を伝えるのが効果的である。外国人にとって、聞き逃すことのない効果は大きい。そこで、たくさんの掲示物が氾濫する中で、外国人の目を引き、そして日本語だけ読んでみようという気にさせる情報の書き方と表現、配列についての規則を決めた^{*8}。「見出しだけは、多く住んでいる外国人の言語で複数書く」「使う漢字や、その使用量に注意し、漢字にはルビ（ひらがな）を振る」「1つの文はできるだけ短くし、分かち書きにして意味をとりやすくする」「できるだけ内容に関連する絵や地図などを付ける」といった規則である。



シャワーが使えますポスター

これまで発災直後は放送（音声）で安全な場所へ誘導し、避難所などの安全な場所に移ってからは、掲示物（文字）で情報を伝えることを推奨してきた。基本的なこの考えに変わらないが、2016年の熊本地震以降、新たな情報の提供手段としてスマートフォンに注目するようになった。スマートフォンメールを災害時に活用する利点としてこれまでと違った次の5点に注目したからである。

- 1) 緊急性の高い情報を放送と変わらない時間内で伝えることができる、
- 2) 情報を後から見返すことができる、
- 3) 放送や掲示物より詳細な情報を伝えることができる、
- 4) 災害下で刻々と変わる情報をリアルタイムで伝えることができる、
- 5) 避難所にいないことが多い外国人被災者へも最新の情報を伝えることができる。そこで研究室ではこれまでの「やさしい日本語」の文構造をそのままに、スマートフォンの画面に対応した伝達方法を提案した^{*9}。



件名：〇〇〇〇市（し）です。逃（に）けてください

〇〇〇〇市（し）に 避難指示（ひなんしじ）が出（で）ました。

避難指示（ひなんしじ）は すぐ 逃（に）げることを 知（し）させます。

〇〇〇〇市（し）に 住（す）む人（ひと）は 逃（に）げて ください。

急（いそ）いで 逃（に）げて ください。

□月（がつ）□日（にち） 午後（ごご）〇時（じ）

〇分（ふん）に

〇〇〇〇市（し）で 地震（じしん）がありました。

津波（つなみ）は 来（き）ません。

津波（つなみ）は 海（うみ）から 来（く）るとても 高（たか）い 波（なみ）です。

近（ちか）くの 避難所（ひなんじょ）に行（い）って ください。

避難所（ひなんじょ）は みんなが 逃（に）げる ところです。

避難所（ひなんじょ）は どの国（くに）の人（ひと）も 行（い）くことができます。

逃（に）げる ところ

〇〇〇〇市〇〇〇〇町〇〇〇〇小学校

□月（がつ）□日（にち） 午後（ごご）△時（じ）

△分（ふん） 〇〇〇〇市（し）

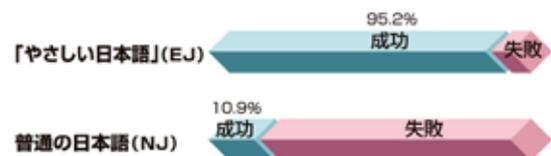
おわり

「やさしい日本語」で伝えることの信頼性

「やさしい日本語」で伝える災害情報は、被災者の命に関わる内容も多い。それを最大公約数的な語と文法で伝えようとするため、外国人住民が「やさしい日本語」での情報を得て、誤った行動を起こすことはないかの安全性を担保する必要がある。

ある。そこで研究では、言語学だけでなく統計学を専門とする研究者も交えての検証実験を複数回行った^{*10}。実験は日本語能力が初級の外国人にも伝わるかや普通の日本語で伝えるときよりも確実によく伝わるかを検証したもので、実験ではさらに「やさしい日本語」で伝えることは日本人にも有用かや、日本人はその表現を受け入れるのかについても検証した。

その結果、どの実験によっても、普通の日本語で伝えるときより「やさしい日本語」で伝えたときの方が行動の指示をよく理解していて、1%水準の有意差を得ることができた。またいずれの実験でも「やさしい日本語」での指示は80%以上の理解率となっていて、「やさしい日本語」で災害情報を伝えることは、外国人が漢字圏出身か非漢字圏出身かに関わらず、日本に住んで1年くらいからなら確実に理解できることを検証した。さらに「やさしい日本語」による表現は、日本人にも受け入れられることも確認した。



世界各国からの留学生88名を対象に、普通の日本語とやさしい日本語の理解率を比較した実験結果。「頭部を保護してください」（普通の日本語）と伝えたときより、「帽子をかぶってください」（やさしい日本語）と伝えたときの方が指示通りの行動をしている。

検証実験グラフ

消防行政に「やさしい日本語」を活用するために

「やさしい日本語」へどう翻訳するのかという技術論については稿を改めることにし、ここでは消防行政が「やさしい日本語」を活用するための仕組み作りについて記す。東日本大震災以降、それは東京都や大阪市がその典型^{*11}だが、多くの自治体が地域防災計画で「やさしい日本語」を活用するようになった。ところで、この「やさしい日

本語」を災害発生時にうまく機能させるには、平時からの取り組みが極めて重要となる。

第一に情報を伝える側、ここでは消防に携わる職員ということになるが、彼らは外国人向けの情報を日頃から「やさしい日本語」で伝える習慣を身に付けていなければならない。指示調の表現が自然な消防職員には、いささか難しいコミュニケーション法かもしれない。そのためには「やさしい日本語」を、まず予防・広報担当の表現として導入し、次いで救急担当、指令担当へと拡大していくのが順番であろう。

この導入、拡大、定着が妥当な理由は後述することにし、まず「やさしい日本語」は日本語でなく外国人の命や安全を守る、消防職員にとって最も表現しやすい外国語であることを自覚することである。そしてさらに、「やさしい日本語」は日本人にもよく通じる表現になっていることを理解することである。

幾度もの繰り返しになるが、「やさしい日本語」は大規模災害が起きたときという、極めて特別な状況で、命を守る情報を迅速かつ確実に伝える表現である。いざそのときになって日本人だからすぐに翻訳できるというものではない。わずか2000の語を12の規則に従って伝えるには、日頃からの十分な訓練が必要である。消防職員が責任をもって伝えることができ、どの外国語を話す外国人も80%以上が理解する「やさしい日本語」にしなければならない。

第二は情報を受ける側の習慣化である。外国人住民には、災害が起きて突然「やさしい日本語」で伝えられる情報が外国語（母語）に代わる表現で、自分たち（外国人）用に伝えられている、ということを経験下で理解することは難しい。そのことに気づき、その情報を信頼するようになるには相応の時間を必要とする。「やさしい日本語」で伝える効果もっとも高い72時間を空白にしてしまう。

外国人のための情報は「やさしい日本語」で伝

えられることや、「やさしい日本語」はどの国の外国人にも理解できる表現になっていることを普段から読んで、聞いて慣れておくことである。

そして第三は、連携部署や連携機関を作ることである。上述1と2を可能にするには消防の予防活動や広報活動と一緒に「やさしい日本語」を使った外国人住民への連絡に取り組んでくれる市区町村の関係機関と連携することである。それは、たとえば国際交流協会であったり、住民課、国際課、防災課など、導入としてはじめての予防・広報活動を署内から、しだいに行政全体の取り組み、いわゆる住民サービスの一環として拡大、定着させていく活動である。

これらの結果として、地域防災計画に書いた「やさしい日本語」による地域の安全は担保されることになる。災害が起きても、外国人は「やさしい日本語」の情報を積極的に受け入れ行動しようと思うようになる。外国人自らが「やさしい日本語」での情報を探し、行動を起こす住民としての姿勢を日頃から醸成しておくことである。

被災住民を救う「やさしい日本語」と Plain English

前節で、消防行政での「やさしい日本語」は予防、広報活動の表現として導入し、順次拡大していくのが望ましいことを記した。このことの根拠事案を紹介する。消防行政が「やさしい日本語」を取り入れる有益性は上述の通りだが、米国の非営利団体 Research ANd Development (RAND) が公開する資料「なぜアメリカ人は災害対応情報を聞かないのか：Why Aren't Americans Listening to Disaster Preparedness Messages?」^{*12}に、多民族国家の米国では、すべての国民に英語での情報が伝わるわけではない。その人たちとはたとえば障害者や高齢者、人種的な条件だったりするが、彼らの限られた英語力で理解するのに普通の英語表現は不十分との前提に立つこと。またウェブに

ある災害対策の説明を住民が読もうとしても難解な英語になっていると指摘する。そしてそれらへの対策として集団に伝えるための掲示物や配布物などは、(小学校) 4年程度の表現にするよう薦める (The recommended reading level for printed information to reach a mass audience is 4th grade)。ここでの小学校4年程度の表現とは、ちょうど私たちが提案する「やさしい日本語」が小学校3, 4年生の国語教科書で使われている文体と相似する。

さらに米国での大災害発生時に対応する州政府機関 Office of Emergency Management (OEM) は、災害下での被災者の英語力は大学を卒業した住民でも小学校4年程度 (4th Grade) になるため、被災者とのコミュニケーションは同程度の表現を使うよう教育されていることや、ロサンゼルス郡での救急活動や市民教育、レスキュー隊の訓練にはプレーンイングリッシュ (Plain English) の使用が義務づけられているといった報告もある^{*13}。

日本の地域社会に外国人住民を受け入れ今後さらに増えていくとき、消防行政は外国語だけに頼らず、職員一人ひとりが責任をもち、そして各国からの外国人住民が理解できる日本語で彼らの安全を担保するという発想の転換が求められる。さらに「やさしい日本語」での情報は、外国語を否定するものでなく、多言語へ翻訳するときの元文として用意されるなら、誤訳の危険性は少なくなり、また翻訳の時間も短縮される。さらに災害が続く間翻訳し続ける職員やボランティアたちの労力も大幅に軽減される利点がある。

この翻訳・通訳し続ける職員たちの負担軽減に関連した重要なことがある。拙稿冒頭で「外国人住民の少ない地域では、外国人のためだけに時間や人員を割くことができない」課題に触れた。「やさしい日本語」で伝えるなら、特定の外国語通訳や翻訳者をあえて用意する必要がなく、消防職員をはじめとする地域住民皆で互いに情報を伝え合うことができる。共助である。ただし日頃からの

訓練は必要だが。

外国人住民が少ない地域でも「やさしい日本語」の効果が期待される理由である。ちなみに地域防災計画に「やさしい日本語」の活用を書き込む行政の増えていることを記したが、18万都市の弘前市はこの理由から、東日本大震災以前の2007年には地域防災計画に「やさしい日本語」による外国人住民対応を位置づけている^{*14}。

「やさしい日本語」を理解するための資源情報

「やさしい日本語」に翻訳する技術論は稿を改めると書いたものの、ここまでを読まれた皆さんは「やさしい日本語」の参考となる文献や資料が欲しいと思ったことであろう。弘前大学の社会言語学研究室と「やさしい日本語」研究会は、そのための資源を全てホームページで公開している。初級段階で有益な資源のアドレスを記し、また「やさしい日本語」の消防職員向けの基礎論が全国市町村国際文化研修所 (滋賀県大津市) の消防職員コース「非常時におけるコミュニケーション」で毎年開講されていることを紹介して稿を終える。

研究室ホームページの「やさしい日本語」資源は全て著作権をフリーにしてあるので、首都直下地震、南海トラフ地震が発生する前に、消防職員や行政相互の「やさしい日本語」対応ネットワークを構築し住民の安全と日本の内なる国際化に役立てて欲しい。

- 「やさしい日本語」について詳しく知りたいとき
弘前大学人文学部社会言語学研究室・減災のための「やさしい日本語」研究会
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ3mokuji.htm>
- 「やさしい日本語」にする12の規則を知りたいとき
『(増補版)「やさしい日本語」作成のためのガイドライン』
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/ej->

- gaidorain.pdf
- 「やさしい日本語」文の作り方を知りたいとき
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/zouhomanual-pdf/1-annbunn/zouho35-46EJtukurikata.pdf>
 - 「やさしい日本語」へ独学で翻訳できるようになりたいとき
 「Eラーニング版 わかる！伝わる！はじめての『やさしい日本語』」
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/e-learningtop.html>
 - 外国人住民や外国人児童へ緊急連絡したいとき
 - さくさく作成！「やさしい日本語」を使った緊急連絡のための案文集
 ～災害時における学校や自治体からのお知らせ編～
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/sakusaku.html>
 - さくさく作成！「やさしい日本語」を使った緊急連絡のための案文集②
 ～災害時におけるスマートフォンメールでの連絡編～
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/sakusaku2-smart-top.html>
 - 「やさしい日本語」の具体例を体系的に入手したいとき
 『増補版 災害が起こったときに外国人を助けるためのマニュアル』
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/zouhomanual-top.html>
 - 防災無線や広報車、コミュニティFMなどでの放送に使う案文を知りたいとき
 - 放送用 時系列案文
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/zouhomanual-pdf/1-annbunn/zouho35-46EJtukurikata.pdf>
 - 放送用 情報内容別案文
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/zouhomanual-pdf/1-annbunn/zouho35-46EJtukurikata.pdf>
 - 外国人にも日本人にも伝わる「やさしい日本語」放送文の読み方スピード
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/onseikennsyoukekka-bunki.html>
 - 「やさしい日本語」を使った掲示物の具体例について知りたいとき
 - ポスターやビラで知らせる
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/poser->
- ikkatubannounasi.pdf
 - 新しくポスターやビラを作る
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/zouhomanual-pdf/2-keizibutu/151-184poster-tukuru.pdf>
 - 「やさしい日本語」を周囲に説明するパンフレットが欲しいとき
 パンフレット・「やさしい日本語」が外国人被災者の命を救います。
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/ejpamphlet2.pdf>
 - 「やさしい日本語」化支援システム (YAsashii Nihongo Slen System) ソフトが欲しいとき
 東北大学 大学院工学研究科 通信工学専攻 伊藤彰則研究室
<http://www.spcom.ecei.tohoku.ac.jp/~aito/YANSIS/> (パソコン用)
<https://play.google.com/store/apps/details?id=util.ejadvisor3app> (アンドロイド用)
 - 「やさしい日本語」についてのその他資料や情報が欲しいとき
 弘前大学人文学部社会言語学研究室サイトマップ
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/sitemap.htm>
- ※ 1 内閣府防災担当部局 (2016) 『平成28年版防災白書』内閣府
<http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h28/index.html> (2017年3月アクセス)
 - ※ 2 内閣府 (2012) 『平成24年版防災白書』内閣府
<http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h24/index.htm> (2017年3月アクセス)
 - ※ 3 法務省入国管理局 「平成28年末現在における在留外国人数について (確定値)」
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00065.html (2017年3月アクセス)
 - ※ 4 熊本市国際交流振興事業団 (2017) 『2016熊本地震外国人被災者支援活動報告書(第2版)』
http://www.kumamoto-if.or.jp/topics/topics_detail.asp?PageID=6&ID=8887&LC=j&type=1 (2017年3月アクセス)
 - ※ 5 YAHOO JAPAN 「熊本地震連載・外国人を悩ませた災害時の日本語」
<https://news.yahoo.co.jp/story/433> (2017年3月アクセス)

- ※6 弘前大学社会言語学研究室(2013)『増補版「やさしい日本語」作成のためのガイドライン』
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/ejgaidorain.html> (2017年3月アクセス)
- ※7 災害時の外国人に情報が的確に伝わる「やさしい日本語」での読み方スピード
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/onnseikennsyoukekka-bunki.html>
 (2017年3月アクセス)
- ※8 「やさしい日本語」のポスターやビラを新しく作るための説明
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/zouhomanual-pdf/2-keizibutu/151-184poster-tukuru.pdf>
- ※9 「やさしい日本語」を使った緊急連絡をスマートフォンメールで伝える案文集
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/sakusaku2-smart-top.html>
- ※10 「やさしい日本語」の有効性
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ5yuukousei.htm>
- ※11 東京都総務局総合防災部防災管理課(2012年)『東京都地域防災計画』
 大阪市防災会議(2012年)『大阪市地域防災計画』
- ※12 RAND: Why Aren't Americans Listening to Disaster Preparedness Messages?
<http://www.rand.org/blog/2012/06/why-arent-americans-listening-to-disaster-preparedness.html> (2017年3月アクセス)
- ※13 内閣府「定住外国人施策ポータルサイト掲載におけるやさしい日本語の活用に関するPlain English(平明な英語)についての調査」
http://www8.cao.go.jp/teiju/research/h25/plain_english/index.html(2017年3月アクセス)
- ※14 弘前市防災会議『弘前市地域防災計画』(平成22年2月修正版)